様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成　25 年　6 月　19 日現在

機関番号：43401
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2011～2012
課題番号：23730782
研究課題名（和文）保育者が保護者に抱く感情の変容過程と保護者支援への応用に関する研究
研究課題名（英文）A Study on the transformation process of consciousness of childcare workers for parents and the application of support to parents
研究代表者
青井　夕貴（AOI YUKI）
仁愛女子短期大学・幼児教育学科・講師
研究者番号：70573674

研究成果の概要（和文）：保育士を対象としたアンケート調査の結果、保育士の経験年数によって保護者に対する意識が変化することが把握できた。保育士の経験年数が 1 年未満では肯定的な印象が強く、5～20 年ではばらつきが多く、21 年以上では肯定的な印象と否定的な印象が混在していた。次に、保育士を対象としたインタビュー調査の結果、保育の経験と共に、保育士自身の結婚や出産、子育ての経験が保護者に対する意識に影響を及ぼす大きな要因となることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：As a result of the questionnaire survey of childcare workers, I was able to figure out that the consciousness of childcare worker about parents varies with the years of experience of childcare workers. The childcare workers who experience within a year have a positive impression strongly, who experience for 5 to 20 years have various impressions, who experience over 21 years have a negative impression with a positive impression. Then, as a result of the interview survey of childcare workers, it was suggested that childcare workers own experience of marriage, childbearing and child care affect the consciousness of childcare workers about parents.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：幼児教育・保育

１．研究開始当初の背景

近年、わが国では子育て環境の大きな変化に伴い、親の育児不安や虐待など、家庭における課題が顕著になっている。そのような状況を踏まえ、平成 13 年の児童福祉法の一部改正により、保育士資格が法定化され、保護者に対し保育に関する指導を行うことが保育士の業務に加えられた。平成 21 年度から施行された保育所保育指針においても、保護者に対する支援が特化された。また、平成 19 年の学校教育法改正では、幼稚園において、保護者及び地域住民からの相談に応じ、必要な情報提供や助言を行うよう明記された。このように保育・幼児教育に携わる保育者には、子育てにおける保護者支援の役割が求められるようになった。

保護者からの相談内容は多種多様であり、保育者は日々の保育・教育の中で、送迎や連絡帳などあらゆる方法を活用し、経験や専門的知識を基に保護者への対応に取り組んでいる。一方で、保護者自身の性格や価値観などの状態も多様化しており、保育者は個々の保護者の状態に応じた関わりに苦悩している現状がある。久保山ら（2009）が、保育者

が対応の難しさを感じている保護者の特徴として、「保育者の話が伝わらない」「子どものことや必要なことを話さない」「園に関心が薄い、協力的でない」「しつけや関わり方が気になる」「子どもに対して過保護、過干渉」「子どもに対して無関心、放任」など 13 のカテゴリーを示しているように、保護者の実態については把握されてきている。保育者は、このような保護者に対しても子育てを支援していくために、意図的に保護者と関わり、保護者に合わせて自分をコントロールしていく必要がある。保育者は、子育てに関する保育者自身の価値観と保護者の価値観のすれ違いを感じながらも、日々の保育に携わる。そのため、保護者への負の感情や保護者との関わりにやりづらさが生じ、自分をコントロールすることに多大な労力を要したり、信頼関係の形成ができない場合も少なくない。住田ら（2008）が、保育者が子どもに対して抱くイメージや価値観が、子どもに対する行動や保育に影響すると示しているのと同様に、保育者の保護者に対する行動には、保護者へのイメージや感情が大きく影響すると考えられる。

しかしながら、援助場面において保育者は保護者に対してどのような感情を抱き、どのように自分の感情をコントロールすれば、保護者に合わせた援助を展開できるかについては、明確にされていない。

２．研究の目的

本研究では、保育者の保護者に対する感情を明確化し、保育者が保護者に対して抱く感情が保護者支援にどのような影響を及ぼすのかを検討する。また、保護者支援の過程で、保育者の保護者に対する感情の変容を解明し、保護者支援における保育者のための新たな実践方法を構築することを目的とした。

３．研究の方法

(1) アンケート調査

A 県内にある保育所 35 ヶ所(公立 13 ヶ所、私立 22 ヶ所）の保育士 655 名、保護者 2855 名を対象に郵送によるアンケート調査を実施した。各園に保育士用と保護者用のアンケート用紙を郵送し、保護者に対しては園を通して配付していただいた。保育士用は園でまとめて返送していただき、保護者用は返信用封筒にて個別に研究代表者まで返送していただいた。

回収率は、保育士が 89.9%（有効回答数 529)、保護者が 44.9%（有効回答数 1183）であった。アンケートの内容は、保育士（保護者）という言葉から受ける印象を示す形容詞対（7 件法)、親しみやすいと感じる保育士（保護者）と苦手だと感じる保育士（保護者）の特徴、回答者のソーシャルスキル、属性などであった。

(2) インタビュー調査

経験年数が 5 年以上の保育士 30 名を対象として、インタビュー調査を実施した。1 名につき 1 回 30 分ほどの半構造化インタビューとした。面接の際、協力者に了解を得た後 IC レコーダーで録音した。

インタビュー内容は、「保護者にどのような印象を抱いていますか？」「これまでに保護者とのかかわりで苦手だと思ったことはありましたか？」「その苦手意識は現在どのように変化しましたか？」「その要因は何だと思いますか？」「経験を積むに従い、保護者に対する意識はどのように変化していますか？」であった。

結果の分析は、録音した内容の逐語録を作成し、質的分析を行った。

(3) 倫理的配慮

アンケート調査、インタビュー調査共に、仁愛女子短期大学が設置する倫理委員会の承認を受けた上で行った。アンケート調査協力者には紙面で、インタビュー調査協力者には口頭で、本研究の目的、方法、任意協力、匿名性の遵守、データ管理の徹底等について説明を行った。

４．研究成果

(1) 回答者の属性

アンケート回答者は､保護者 1183 名(男性 56 名、女性 1068 名、無回答 59 名)、保育士 529 名（男性 3 名、女性 492 名、無回答 34 名)であった。回答者の年齢構成は表 1 に示した。回答者の園種別では、私立では保護者 560 名、保育士 323 名、公立では保護者 561 名､保育士 172 名となった(無回答の保護者 62 名、保育士 34 名)。保護者の職業としては、パート・アルバイトが 383 名と最も多く、次いで会社員、自営業、公務員であった。保育士の勤務形態では、正規が 313 名、臨時等が 176 名、無回答が 40 名であり、経験年数は 10 年未満が 243 名、10～19 年が 128 名、20～29 年が 53 名、30 年以上が 57 名、無回答が 48 名であった。

表 1.回答者の年齢（名）

	保護者	保育士
10 代	1	5
20 代	165	173
30 代	836	127
40 代	172	90
50 代	4	86
60 代	5	12
70 代	0	2
無回答	0	34

(2) 保育士と保護者の意識の比較

20 の形容詞対において、左の形容詞に「非常にあてはまる」を 1 点、右の形容詞に「非常にあてはまる」を 7 点とし、保育士・保護者別に各形容詞対の平均点を図 1 に示した。全体的に見ると、両者とも肯定的な意味を持つ形容詞への回答が多かった。保育士の平均点では、「親しみやすいー親しみにくい」の

3.3 から「にくらしいーかわいらしい」の 4.8 まで幅があった。一方、保護者の平均点では、「親しみやすいー親しみにくい」の 2.1 から「感じのわるいー感じのよい」の 5.9 まで幅があった。また、保育士はすべての項目で「どちらともいえない」を選択する人数が最も多かったことに対して、保護者は 20 項目中 3 項目のみで「どちらともいえない」を選択する人数が最も多かった。つまり、保育士は保護者という言葉から受ける印象を平均的に捉え、保護者は保育士という言葉から受ける印象を端的に捉える傾向があると示唆される。

24 の保育士（保護者）の特徴から、「親しみやすいと感じる保育士（保護者）」の特徴として選択した人数の割合を各特徴別に算出した結果の一部を図 2 に示した。保育士の選択率は、すべての項目において 5 割以下であったが、「笑顔が多い（45.6%）」が最も多く、次いで「口調が穏やか（42.5%）」「何でも話す（36.5%）」であった。一方、保護者の選択率が 5 割以上だった項目は、「笑顔が多い（94.9%）」「子どもとの関わりが上手（87.0%）」「あいさつをする（83.4%）」「口調が穏やか（69.3%）」「冗談が通じる（52.9%）」であった。つまり、保育士は保護者への親しみやすさを多岐にわたる視点で捉え、保護者は保育士への親しみやすさを限定した視点で捉えている可能性が考えられる。

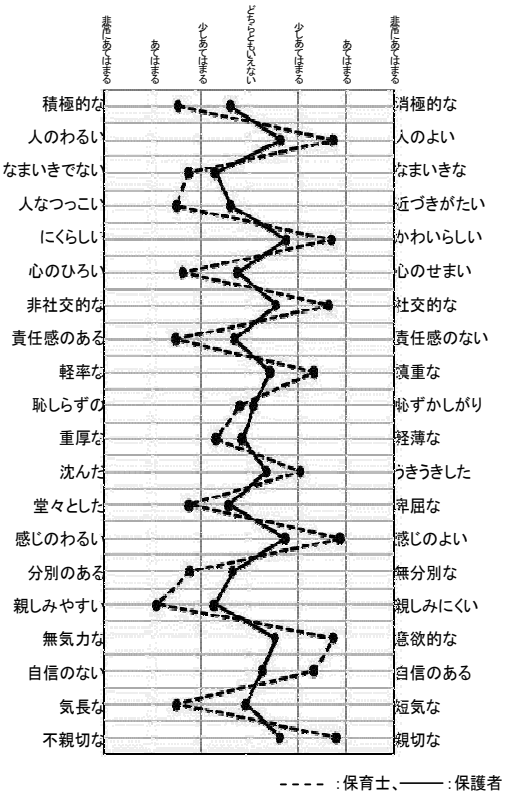

図 1. 保育士と保護者別における形容詞対回答の平均

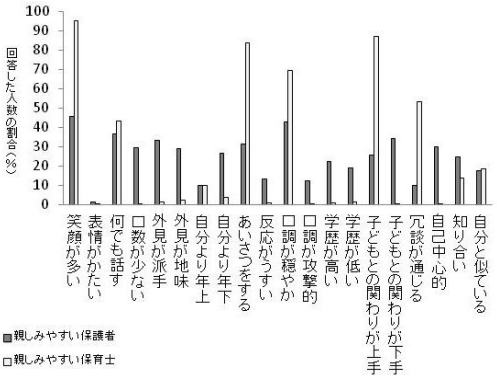

図 2. 親しみやすい保育者と親しみやすい保護者の特徴

(3) 経験年数別にみた保育士の意識

保護者という言葉から受ける印象を 20 の形容詞対において、左の形容詞に「非常にあてはまる」を 1 点、右の形容詞に「非常にあてはまる」を 7 点とし、経験年数別の平均を表 2 に示した。さらに、各項目において最も高かった平均と最も低かった平均に色付けをした。全体的な傾向としては、平均の最高点と最低点は経験年数が 1 年未満と 21 年以上に多かった。項目別に最高点と最低点の差を比較すると、「責任感のあるー責任感のない」と「分別のあるー無分別な」の差が最も大きかった。

保護者の特徴を表した 24 項目から「親しみやすいと感じる保護者」と「苦手だと感じる保護者」の特徴をそれぞれ自由に選択した総個数を経験年数別に示した結果が図 3 である。親しみやすいと感じる保護者の特徴の個

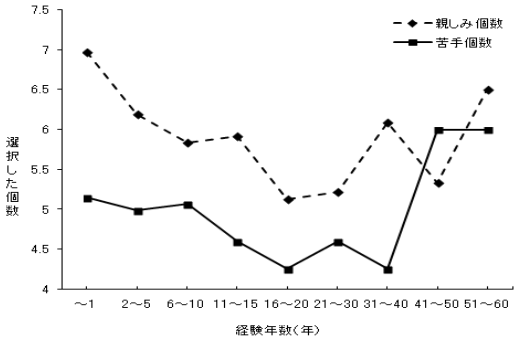

図 3.親しみやすいと感じる特徴の個数と苦手だと感じる

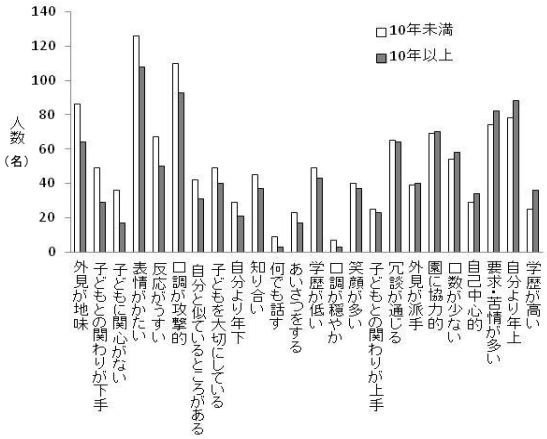

図 4.「苦手だと感じる保護者」の特徴（経験年数別）

表2. 経験年数別にみた保護者に対する印象の平均点（点）

	～1年	2～5年	6～10年	11～15年	16～20年	21～30年	31～40年	41～50年	51～60年
積極的な-消極的な	3.3	3.5	3.7	3.6	3.7	3.7	3.8	3.3	3.0
人のわるい-人のよい	5.3	4.8	4.6	4.7	4.7	4.4	4.5	4.3	4.0
なまいきでない-なまいきな	2.8	3.1	3.3	3.4	3.5	3.7	3.6	2.7	3.0
人なつっこい-近づきがたい	3.8	3.6	3.8	3.6	3.6	3.5	3.6	3.3	4.0
にくらしい-かわいらしい	5.1	4.9	4.6	4.7	4.9	4.6	4.8	5.0	5.0
心のひろい-心のせまい	3.6	3.7	3.7	3.8	3.8	4.1	3.9	4.3	3.5
非社交的な-社交的な	4.8	4.8	4.4	4.5	4.6	4.3	4.3	4.7	5.0
責任感のある-責任感のない	3.2	3.7	3.6	3.7	3.9	3.8	4.0	4.7	3.5
軽率な-慎重な	4.7	4.7	4.4	4.4	4.3	4.1	4.2	4.0	4.0
恥しらずの-恥ずかしがり	4.1	4.1	4.1	4.1	4.2	4.0	4.1	3.7	3.5
重厚な-軽薄な	3.4	3.8	3.9	3.9	4.1	4.0	4.0	4.3	4.5
沈んだ-うきうきした	4.8	4.4	4.4	4.3	4.4	4.3	4.2	5.0	5.5
堂々とした-卑屈な	3.0	3.5	3.6	3.6	3.7	3.9	3.7	4.3	3.0
感じのわるい-感じのよい	5.2	4.9	4.7	4.7	4.7	4.4	4.6	4.7	5.0
分別のある-無分別な	3.5	3.7	3.7	3.6	3.8	3.9	3.6	5.0	4.0
親しみやすい-親しみにくい	3.3	3.3	3.3	3.2	3.2	3.5	3.5	3.3	3.5
無気力な-意欲的な	5.0	4.7	4.5	4.5	4.6	4.2	4.3	4.3	4.5
自信のない-自信のある	4.6	4.3	4.3	4.4	4.1	4.0	4.2	4.3	5.0
気長な-短気な	3.6	3.8	4.0	4.0	4.1	4.0	4.1	4.3	5.0
不親切な-親切な	5.0	4.8	4.6	4.6	4.6	4.4	4.5	4.0	5.0

数と苦手だと感じる保護者の特徴の個数を比較すると、全体的には親しみやすいと感じる特徴数の方が多く選択されていた。経験年数別に比較すると、両特徴数が 16～20 年を中心に少なくなっていた。また苦手だと感じる特徴数においては、41 年以上の場合が顕著に多くなっていた。

図 4 には、「苦手だと感じる保護者」の特徴として選択した結果を、経験年数が 10 年を区切りとして各特徴別に示した。経験年数が 10 年未満の場合、「表情がかたい」「口調が攻撃的」「外見が地味」などが、10 年以上の場合、「表情がかたい」「口調が攻撃的」「自分より年上」「要求が多い」などが高かった。

このように、経験年数が少ない場合と経験年数がかなり多い場合は、保護者に対する意識が質的には異なって明確化されている可能性が見出された。一方、経験年数が 10 年前後の場合、意識にばらつきがみられたため、保護者との関わりに大きく影響されているのではないかと考えられる。

（4）保育士の意識に影響を及ぼす要因とその過程

インタビュー回答者の平均経験年数は 17.7 年であり、10 年未満が 2 名、10～14 が 6 名、15～19 年が 10 名、20～24 年が9 名、25～29 年が 2 名、30 年以上が 1 名であった。

保護者に対する意識については、否定的な印象が固定化されていることは少なく、さまざまな保護者がいるため、具体的な印象は抱いていないという回答が多かった。その中で、具体的に苦手意識が高くなる傾向の保護者の状況としては、「反応が薄い」「表情の変化が少ない」という特徴が挙げられた。保護者の気持ちや考えを把握することが難しいため、自分の関わりを定められない場合に、大きな労力が必要となるという理由からであった。

保護者に対する意識の変容については、経験年数が 5 年くらいまでは保育の経験を積むことに重点が置かれ、10 年くらいにかけて保育に見通しを持つことができるようになり、保護者と信頼関係を築くことにつながる具体的な関わりを模索することが多かった。その後、保育士自身が結婚、出産、子育てを経験することが多く、自身も保護者という立場になったことで、保護者との具体的な関わりが大きく変わるわけではないが、保護者との関わりに対する意識は大きく変化する傾向があった。具体的には、子育ての苦悩や喜びなどに対する受容や共感がより一層深まったという意識が強くなることがわかった。

このように、保育経験を積み重ねることによって保護者を援助する具体的なスキルを高め、保育士自身の個人的な経験（結婚、出産、育児など）が援助に対する価値観や保護者に対する意識に影響を及ぼすことが示唆された。したがって、保護者との関わりは、保育士の保育経験と人生経験によって変化する過程が存在し、その過程を参考にすることで見通しがもてる保護者支援につながると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔学会発表〕（計 2 件）

①青井夕貴・西村重稀、保育士と保護者が相互に抱く意識に関する研究、日本保育学会第 65 回大会、2012 年 5 月 5 日、東京家政大学

②青井夕貴、保育士が保護者に抱く意識に関する研究、日本保育学会第 66 回大会、2013 年 5 月 12 日、中村学園大学・短期大学部

６．研究組織

(1)研究代表者

青井　夕貴（AOI YUKI）
仁愛女子短期大学・幼児教育学科・講師
研究者番号：70573674